



# Ho! ManaBU しんぶん

子どもの笑顔に会うために！



□ オロミア州

## 地域別研修者の驚き

～ 学校の動きかけと地域住民の熱心さにびっくり！～

JICA 国内センターのひとつである JICA 北陸では、サハラ砂漠以南（サブ・サハラ）地域の省学校の校長や教育行政官を対象とした地域別研修「サブ・サハラ地域における学校運営改善」を 2006 年から実施しています（関連記事：ManaBU しんぶん 45 号）。この研修には、エチオピアからも毎年参加していて、フェーズ 2 の 2 年目にあたる今年は、8 月 30 日から 10 月 15 日までの日程で開催され、エチオピアのほか、ガーナ、ザンビア、マラウィから 12 名の研修生が参加しました（エチオピア参加者はプロジェクト対象県、郡の行政官各 1 名）。特に今年は研修の締めくくりとしてエチオピアで在外補充研修が行われ、フェーズ 1 からこの研修運営にご尽力されている金沢大学の田邊俊治教授と JICA 北陸の木水薫代職員も同行され、研修生は、エチオピア滞在中 Ho! ManaBU や ManaBU プロジェクトの対象校視察などを通じて特にオロミア州での学校運営について学びました。

到着翌朝、研修生は早速 JICA 事務所へ表敬訪問。午後からはオロミア州教育局（OEB）で同州の教育事情や Ho! ManaBU についてのブリーフ



ィングを受け、次の日はいよいよ学校訪問。まずは首都アジスアベバの南東約 170 キロに位置するアセラ特別市のリマット・ベヒブラット小学校（Ho! ManaBU パイロット校）を訪れました。当日は、熱気ムンムンの図書室でクラスター・リソース・センター（CRC）担当官と教務主任が地域住民を対象として行う、中途退学への「気づき」をテーマとした Ho! ManaBU 研修を視察。



地域住民に質問する研修生



熱心に校長の説明に耳を傾ける

昼食後、車で 1 時間ほど移動し、アルシ県ヘトサ郡のデヤ・デベソ小学校へ。本校は、日本政府の草の根・人間の安全保障無償資金協力を得て、なんと地域住民がわずか 45 日で ManaBU モデルの学校建設を完了させたという伝説校(?)。フェンスの設置や教員宿舎の建設、教室の増築など、継続的な学校環境整備に努めており、「子どもたちによりよい学校を」という地域住民の熱意は開校 4 年目の今年、中途退学者ゼロという形で実を結んでいます（関連記事：Ho! ManaBU しんぶん 19 号、ManaBU しんぶん 36・42・47 号）。

両校での意見交換会で研修生から学校関係者や地域住民に投げかけられた質問は、現場の課題を知っている人ならではのものばかり。自分たちが抱える問題と重ねあわせ、両校の取り組みを自分たちの教育現場にもぜひ取り入れたいという思いが強く感じられました。例えば..。

Q: 女性の研修参加者がなぜこんなに多いのか？ガーナでは考えられない。

A: 男性は外で作業しているので児童に近い存在の母親が参加している（この学校は保護者との連絡が密で女性も気兼ねなく研修に参加できる環境にある）。

Q: 授業時間中に児童が研修に参加しているのはなぜか？

A: 二部制を敷いており、午後部の児童が参加している。ほかの児童への啓発活動にもつながっている。

Q: どのように地域住民を研修に動員しているのか？研修実施は学校の負担にならないのか？

A: 最初は地域住民の関心を引くのに苦労しましたが、私たちも追加業務だと思っていた。しかし、研修参加者が中途退学などの問題について理解し、状況が改善されてくると、地域住民も積極的に参加してくれる。私たちも、今や業務の一環としてとらえている。

（以上、リマット・ベヒブラット小学校）

Q: 地域住民はどのように学校運営に参加しているのか？

A: 施設の建設では資材や労力の提供をしたし、学校に水道を引いたケースもある。

Q: オロミア州の 1 年次の中途退学は 30%と聞いている。なぜこの学校は中途退学率 0%が可能なのか？

A: 子どもが欠席し始めると、みんなが家庭を訪問し、学校の大切さを理解してもらっている。

（以上、デヤ・デベソ小学校）

\*Ho! はオロモ語で Hoggansa（運営）の最初の二文字、ManaBU は Mana Barnoota Ummataa（コミュニティの学び舎）の略で、本プロジェクトが支援する地域社会に根ざした小学校運営のことです。

両校の校長や地域住民の説明は種も仕掛けもないけれど、地道な取り組みを淡々と語る口調は実に説得力があり、研修生も熱心に耳を傾けていました。

翌日は、アジスアベバでマルガ副局長をはじめとするOEB職員やJICA事務所大田孝治所長、連邦教育省や連邦経済財務省の職員を迎えて、意見交換会が行われました。マラウィからの研修生の一人は運動会の開催を計画しているそうで、大田所長からは紅白の玉の代わりに地元で入手できる身近な物を使った玉入れが紹介され、青年海外協力隊の体育隊員との連携も可能では？というアドバイスも出されました。またエチオピアの研修生は、「現在の教育データは不正確」とOEB職員を前にして堂々の発言！質の高い教育提供のための教育統計管理能力向上計画を発表しました。しんぶん前号でもお伝えしたように、プロジェクトでは「きちんとした定義に基づいた中途退学者数の把握の必要性」をOEBに提案しており、研修生の計画案支援を通じて、この取り組みが試行できるのではないかと考えています。



各国の研修生からは、「エチオピアの住民参加は高い。特にデヤ・デベソ小学校の地域住民の学校との関わり合いは素晴らしい。」「ガーナでは、教育は政府がすべてやるものと地域住民が考えている。エチオピアのように住民参加をもっと促進するよう努めたい。」「魅力のある学校にすれば、地域住民は協力してくれることがわかった。マラウィでもぜひ実践したい。」というような声が聞かれました。これに対しフラは、「地域住民の学校運営への貢献度は、量的にみればおそらく日本よりエチオピアの方が上。今後はいかに主体性を向上していくかが鍵。」「教育へのアクセス改善には地域住民が大きく貢献してきた。ただし、質の高い教育へのアクセスへの対応となると...政府の役割が不可欠なのは？」と、「住民参加」の名の下、何でも地域住民に依存してしまう危険性に対して逆に問題提起もしました。

今回の在外補完研修は、プロジェクトチームにとっても、オロミア州の学校運営への地域住民の参加度の高さや、学校側から地域住民への積極的な働きかけの大切さを再認識する機会となりました。各国の研修生は、今頃母国で日常業務に追われる毎日でしょうが、ほんのわずかでも研修で得た知識や経験を活かした学校運営改善に取り組めるよう(Ho! ManaBU研修を自国でやりたいと言ってましたし...) 応援します！

## 「Discover our school」トライアル開始！

Ho! ManaBU 研修 2 年目の教材は「Discover our school」。1年目の「気づき」に続いて、「分析」が大きなテーマとなっています。11月下旬から開始予定のファシリテーター研修とそれ以後の学校レベルでの研修を控え、教材やマニュアルの作成も追い込み段階に入っています。この研修の核となるのが、「クイズ」と「チャートシート」。両教材についてはすでにお伝えしましたが、覚えていますか？(しんぶん 20号参照)

研修は大きく 2 つのパートからなっています。パート 1 の参加対象者は学校教員で、各教員がトイシ、中途退学率などの質問について自分たちの学校ではどうなっているかを調査・分析して、その状況に最も近い答えを 5 つの選択肢の中から選び、学校として今後どのような取り組みをするべきか話し合います。パート 2 の対象者は地域住民とパート 1 に参加していない教員。再び「クイズ」で学校の状況を考え、パート 1 で合意された解答と今後の取り組みについて議論するとともに、チャートシートを見ながら、学校の全体像を共有するという流れになっています。

先日、前述のデヤ・デベソ小学校の協力を得て、パート 1 のトライアルを 2 週にわたって行い、研修の進め方、教材の使い勝手、議論の進行の方法、進行補助役の役割などを検証しました。調査内容と答えの選定についての議論は白熱！進行役もタジタジでしたが、参加教員からは、「自分たちの調査分析がチャートシートに示されることで、学校の特徴や個別の問題について知ることができた。」「これまで、学校をこのように見たことはなかった。学校計画を考える上でとても参考になる。」と好評でした。パート 1 の重要なポイントのひとつは、各項目の調査や答の選定は、正しく、かつ共通の理解に基づいて行うこと。実際、トライアルでは地域の不就学児童の割合についての答えを選ぶ過程で、「不就学児童」の定義が教員間で異なっていることがわかり、話し合いを通じて、全教員が「不就学児」の定義を理解し、学校内での共通認識が持てました。



パート 1 のトライアルでは、段取り、教材、進行方法など、修正・改善が必要な点も明らかになり、とても有意義でした。この後、地域住民を対象とした研修トライアルを行い、その後、教材の最終化へと向かいます。さて、デヤ・デベソ小学校の地域住民は自分たちの学校についてどのぐらい知っているか？パート 2 のトライアルが楽しみです。